

合図に列席者は深々とお辞儀するのである。数分後にはカーテンは再び閉められ、校長は後ろ向きに演壇から降りる。

卒業式は卒業生が中心となって行われるが、教授達も招待される。長机には無数の茶瓶と色々なお菓子が並べられる。男子教職員が式場の一方の側に座り、それと向き合うように生徒達が着席する。そして互いに礼をして式が始まる。まず生徒代表が登壇し、長々と送別の辞と感謝の辞を述べる。その中では特に恩師達の授業振りが讃えられる。それに対して数人の教授が答辞を述べる。それが終わると、会場全体に、「さようなら」が響き渡る。

ビュットナーにとって6年間の日本の高等学校での教師生活の中で、特に印象深いことが二つあった。一つは七高時代に修学旅行で1週間かかって大阪商船の2隻の大きな汽船に乗って琉球へ行ったことである。もう一つは大正天皇がまだ皇太子の頃に鹿児島島の七高造士館を訪れたことである。天皇家は日本国民から半ば神と見なされており、旅行することは考えられなかったので、皇太子が薩摩藩主の居城の跡に建てられた造士館を訪問したことは、歴史的な事件として学校関係者には感銘を与えたのである。しかもこの時ビュットナーは同校に勤務する唯一の女性教師として皇太子に紹介される光栄に浴したのである。

やがて第一次大戦が勃発し日独は互いに敵国となったが、ビュットナーは日本に留まった。何も恐れることはなかったからだ。五高校長は戦争に関して感銘深い演説をし、生徒達に向かって強い調子で、全てのドイツ人に、特にビュットナー先生に対して親切に、礼儀正しく接するように注意した。彼の演説はビュットナーに深い印象として残った。また五高生も師が敵国に踏みとどまったことに感謝し、師の一族の者が出征していることに深い同情を示しているようだった。そして彼らは、ドイツ語を学ぶことは依然として必要だと考えていた。

ドイツ留学時代の長江藤次郎



長江藤次郎

五高ドイツ語教授長江藤次郎(1870-1934)は1909年(明治42)2月17日付で「独逸語研究ノ為」文部省より満2年間のドイツ留学を命じられた。ゲルマニストの文部省留学生としては山口小太郎、藤代禎輔、中村健一郎、田代光雄、澤井要一に次いで6番目であった。長江は大阪生まれで、第三高等中学校を経て、東大独文科に学び、卒業後は大学院に入り、戯曲論及びドイツ戯曲史を専攻した。その後学習院の嘱託教授や本郷元町の独逸語学校の講師を勤めたが、1899年(明治32)9月10日、山口高等学校教授に就任し独語を担当した。6年後、依願免本官となったが、この時履歴書(山口大学蔵)によると、多年山口高に勤務した慰勞として防長教育会より金時計一個と金千三百円を贈られている。1907年(明治40)1月に至り、今度は五高教授に就任した。そしてすぐに第五学科(独語)主任を命じられた。そこへ2年後の留学である。五高赴任に際して校長との間に留学に関して何らかの約束があったのではある

まいか。と同時に長江のドイツ語学者の地位が当時相当高かったことを示していると思う。

長江の留学で注目されるのは、学校当局に留学生活について逐一報告していることだ。彼の几帳面な性格を窺わせる。出発前にも森鷗外にドイツの劇評家ユリウス・バープの住所を尋ねたりしている（明治42年2月8日鷗外日記）。これでも分かるように、独語研究は名目で彼の関心は演劇にあった。3月に29日にドイツに向けて日本を出発し、イタリア、スイスを横断してベルリンに到着したのは6月10日で、シャルロッテンブルク地区のウーラント街の下宿に落ち着いた。二日後には王立楽劇場（ケーニクリッヘス・オペルンハウス）でワーグナーの「神々の黄昏を」を観た。明治42年の8月号『東亜之光』の「彙報」欄に長江の友人某に宛てたベルリンからの書簡が紹介されている。その一節に「ワグネルの『ゲッターデムメルンク』を見物するを得たるは、積年の渴を医したる心地致候、それも最終日にて今日遅れ候はんには、季節はづれとなり、しばらくは見難く候ものゆえ取分け愉快を感じ候」と書いている。さらに井上哲次郎に宛てた書簡「在伯林文学士長江藤次郎氏」（明43年3月号『東亜之光』）によると、長江はその後シャウシュピールハウスでグツコウの「下げ髪と剣」を観ており、特に当時新進の劇作家だったゲルハルト・ハウプトマンの朗読会に出かけている。それはベルリン到着後4か月立った10月17・18両日にベルリン音楽学校（ジングアカデミー）で行われたもので、長江は二日目の分を聞いた。聴きに行ったのは、一つには朗読会とはいかなるものか知りたかったのと、また一つには兎に角有名な脚本家の声を親しく接して聞きたいからであった。ハウプトマンの朗読振りを次の様に描写している。

「西暦千八百六十二年生れなれば未だ五十に手の届かざる髭無き男萌黄の笠の電灯の輝ける机の前に、常に左に原本を手にし壇上に立ちて読む様或は緩に或は急に調流るよと見れば諭すが如く弁解するが如く憤りつ怨みつ又乍ちにして呪ふ。其間常に右手は動きて須臾も止まるなく今額に触る、よと見れば右に展き左に払ひ天を指すよと見れば胸を打つ。（中略）初見にては詩人らしくも覚えず候。寧ろ商人風に想はれ候。（中略）果して彼が朗読法の巧妙なるや否やは片言双句を僅に解し得たる小生風情、況して生得朗読法は日本語にてすら前後只一回文科遠足会の砌日光山にて故外山〔正一〕先生の^{それ}を聴きしに過ぎざること、て只受けし印象を其儘書き候に止め候が当然と存候。」

当日のプログラムでは「日の出前」「ハンネレの昇天」など旧作8編が朗読されることになっていて、長江はそれらを読んでいたので少しは理解できると期待していたが、看板に偽りありで未刊行の脚本と抒情詩数篇をハウプトマンは朗読した。長江は「朗読の文字は詩の場合に限り適当と存候」と書いている。ハウプトマンは各朗読が終わるたびに拍手を浴び、立ち上がって軽く頭を下げ謝意を表した。

さらに長江はベルリンの新聞記事によって、ウィーンでもハウプトマンは自作の朗読を行い大喝采を浴びたことを伝えた後、同年10月21日にはレッシング座でハウプトマンの「沈鐘」を観たとを伝え、俳優の衣装に寸評を加えている。またドイツの友人に聞いた話として最後には、ハウプトマンの現在の夫人は三番目であって元は養女でバイオリンの名手であったこと、第二番目の夫人はさしたる理由もなく離縁されたことなども記している。このように井上哲次郎宛の書簡はハウプトマン一色であるが、これは当時日本では自然主義文学が勃興し、さらに鷗外による評伝『ゲルハルト・ハウプトマン』（明治39年、春陽堂）が出版されるなどこの新進の劇

作家に対する関心が高まっていたので、それに応えようとしたものであろう。

長江はベルリン大学には10月7日に入学手続きをし、以後3学期学んでいる。即ち1909年から翌年に至る冬学期、1910年夏学期、10年から11年に至る冬学期である。

現在フンボルト大学の資料館には彼が聴講した講義題目を記した資料が残っている。長江はドイツ文学の大家エーリッヒ・シュミット教授の「19世紀ドイツ戯曲家」を聴講するつもりだったが、丁度同教授がベルリン大学総長に選ばれ多忙となりこれは取りやめになったので、同教授のヘッベルに関する講義と、ノイハウスという人のイプセンの講義を聴いたようだ。

ベルリン時代の長江は大学ではエーリッヒ・シュミットのヘッベルの講義の外には、他の教授のもの（イプセン）を少し聞いたぐらいで、あとは演劇やオペラの鑑賞に熱中したであろうことは上記の井上哲次郎宛の書簡から想像が付く。ベルリンでは1学期を学んだ後、今度はボン大学に移り同じく1学期学んでいる。

文部大臣小松原栄太郎宛「申報書」（従明治四十三年五月至同年九月）によると、長江は6月以降8月20日までボン大学文科大学東洋言語学受験生クルト・バイヤーと、ドイツ語及びドイツ文学と日本語の交換教授を3時間ずつ行い、7月以降8月20日まで毎週一回一時間半同大学文科大学受験生カール・ポートより作文の添削を受けた。そしてポートに謝金21マルクを支払っている。また7月1日には貴族院議員伊藤長次郎、京都大学教授谷本富とエッセンに赴き、岐路ジュッセルドルフを經由で同月3日にボンの下宿に戻った。エッセンには有名なクルップ製鋼会社があり、それを視察に行ったのであろう。

ボン大学の次には長江はミュンヘンに転学しているが、これは当時の日本人ゲルマニストの中ではやや異例である。初期の日本人ゲルマニスト例えば、1900年（明治33）に最初の文部省派遣の留学生として渡独した山口小太郎と藤代禎輔はベルリン大学では1～2学期学んだ後、いずれもライプツィヒ大学に転学している。二人より少し前の尺秀三郎はライプツィヒに5年もいたし、北里闌もミュンヘンに2年学んだ後、ライプツィヒに来てやはり2年間過ごしている。長江と同時期の文部省留学生上田整次もライプツィヒを選んでいる。このように初期のゲルマニストにとってライプツィヒはメッカだった。だが長江はそこには行かずボンを経てミュンヘン大学に転学しているのである。これは思うに、大学の講義もさることながら、彼は実際の演劇を観ることを望んだ結果ではあるまいか。ライプツィヒは学都のイメージが強いが、ミュンヘンはベルリンと並んで演劇が盛んな土地だった。今でもそうである。さて、長江は「申報書」（従明治四十三年十月至同四十四年四月）においてミュンヘン大学で聞いた講義について次のように報告している。

民顕大学文科大学ニテムンケル教 Ord. Prof, Muncker ニ就キテ「近世戯曲ノ起源」Die Entstehung des modernen Dramas. 助教授フライヘル・フォン・デン・プオルテン氏 Ausserord. Prof. Freiherr von den Pfordten ニ就キテ「リヤルド・ワグナア伝及其著作」Über Richard Wagners Leben und Werke. 講師クッチエル氏 Privatd Kutscher ニ就キテ「第十九世紀独逸文学史」Die Geschichte der deutschen Literatur des 19. Jahrhunderts. 及演劇史 Die Geschichte der Bühne, Theaters usw. ヲ聴ク
昨年十月以降三月末迄同文科大学生 Walter Schneider ヨリ独逸語学ヲ学習ス

これによって主として専攻する演劇関係の講義を聴いてることが分かる。そのほかここでも大学生を相手にドイツ語の勉強している。そして入学金と聴講生としての聴講料を併せて総額36マルク納入し、前記ワルター・シュナイダー氏に授業料毎時間1マルクの割で払ったと報告している。さらに本年4月2日より5月5日までスイス、イタリア、オーストリアに旅行したと記した。それからこの頃の留学生に多く共通して見られることだが、長江もミュンヘンでは学校参観をしばしば行っており、高等学校では特に英語、独語、ラテン語の教授法を来観した。この「申報書」の日付は明治44年(1911)5月8日で、長江の宿所は「独国民顕府アドルフライター街十八番地」となっている。なお、この「申報書」には書かれていないが、履歴書によると、長江は明治44年3月28日付で満1年間私費留学の延期が許可されている。

次の「申報書」(従明治四十四年五月至同年十月)は再びベルリンに戻って書かれたもので、長谷場純孝文部大臣宛。日付は明治44年(1911)10月15日、宿所は「伯林府プフワルツブルガア街六十六号」となっている。前半ではミュンヘンで次々3人の大学生からドイツ語の教授を受けたことが書かれ、さらにベルリンでもベルリン法科大学生に教えを受けたとある。独語の先生には専ら大学生がなっているのは、授業料が安く済んだためだろう。ほかにミュンヘンでは仏語もフランス女性について習っている。明治44年10月9日に再びベルリン大学に入学し、エーリッヒ・シュミット教授「19世紀独逸劇詩人」、ヘルマン教授「1848年以後の独逸文学史」、ガイガー教授「近世文学史研究の栞」及びバスツコウイスキ教授「独逸生活の模様並に諸般の制度文物」等の講義を聴いた。

なお当時ベルリン大学に留学していた日本人ゲルマニストには長江のほか、武内大造(第七高等学校造士館教授)、片山正雄(第二高等学校教授)、山岸光宣(早稲田大学教授)がいた。これらの人々との交流はいかなるものがあったか知りたいところだが、それを示す資料はない。そして最後の「申報書」(従明治四十五年四月至明治四十五年六月)は帰国直後、大正元年8月2日東京で書かれている。修業等については次のように簡単に報告している。

如従前伯林大学在学ノ所五月二十四日同大学退学

伯林市シャロテンブルグ(Charlottenburg)在住シュミット夫人(Frau Oberlehrer Dr. Schmidt)ニ就キテ独逸語教授ヲ受ケ居タル所四月末日ヲ以テ之ヲ止ム毎週三時間一時間謝礼一馬克半ノ割

そして帰国の時期が迫ってきたので、最後の思い出に長期の旅に出ている。即ち、6月1日にベルリンを立ち、マゲデブルク、アイスレーベン、ハルツ、ハンブルク、ブレーメン、キール、リュエベック、ロストック、コペンハーゲン、ストックホルム、リュエゲン島、フランクフルト・アム・オーデル、ブレスラウ、ザルツブルン、シュライベルク、オーデルベルヒ、モスコウ、ペテルスブルクを巡歴し7月8日に至った。この間もベルリンとフランクフルトでは高等学校と小学校の参観を行った。その後シベリア経由で帰国した。